



## 弱虫太郎

彌彦

昔々或處に大層な子福者がありまして太郎さんを頭に八郎迄の兄弟がありました。

さて兄さんの太郎さんは誠にくおとなしい子で學校ではよく先生の云ふ事を聞いて勉強しますしおうちに歸ればお父さんといっしょに

畑へも行きますし又お母さんのお手傳に赤ちゃんのおもりもよくし  
 ますして又遊ぶにも砂のお山を作つたり附木のお舟を川に浮べた  
 りしてそれはおとなしいのです處が次郎さんからの弟どもぼどう  
 した事か誠にあばれやでひまさへあれはお相撲ばかりハツケヨイ  
 くと取りて居るのです

時は丁度四月の半ば野にはれんげやたんぼゝがうつくしくさき雲  
 雀も可愛らしく歌ふうらゝかな日曜に八人の兄弟は打つれ立ちて  
 近所の山へ遊びに参りました太郎はいつもの通り一人で花を見た  
 り蝶々を追うたりして楽しさうに遊んで居りますと次郎たちは之  
 も相かばらずハツケヨイくと掛聲も勇ましく力競への最中です  
 何しろ毎日くして居る事で子供とは云へ皆中々強くて容易に勝

負がつきませせん次郎は思はず大聲にウーンと力みますと其聲が山の奥迄響いたと見え今しも心持よく晝寢最中の魔王は岩の枕から重さうな頸を上げ

「ア、子ムイ〜それはそうと今の大聲は何だらふまた小げもの共がけんかでもして居るのだらふどれ〜一ついつて見ませう」とどしり〜と出掛けましたいつて見ると思ひがけない可愛らしい男の子たちがおすまふの最中でした魔王は木の蔭から見居りますとやがて次郎か皆をまかしました

次郎はいかにもおれ一人と云ひそんな顔をして

ア、皆んな弱虫だな僕の子指にもかなやしないだらふさあてんだ皆んな一どきにかゝって来てごらん

と云ひますので弟共は皆くやしそうに今度こそは一生懸命一どに前からも後からもかゝて來ましたが何しろ年下の者許りですから又次郎が勝になりましたそこで次郎さん又大威張

「どうだいかなうまい 僕程強いものありやしないなお隣のおちさんだってお向ふの兄さんだって何でもありやしないあゝ僕より強い者がいないかしらね三ちゃん」

と弟に話し掛けました三郎はくりくりした目で兄さんを見ながら「兄さんそんなに威張たつてだめだ僕たち小さいから負けるのだけれど大人なら兄さんかなうものかそれよりかね兄さん此お山に魔王ってね大變強い〜人か居るんだとさ此間お父さんそらいつたよだからこはいからあんまり威張るのおよしよ

と云ひますと次郎は

「何だい三ちゃん羽虫だな魔王なんて強かないんだよそれより僕の方  
方がよっぽどきつと強いよ魔王こゝへくりやいな僕勝て見せる  
るがな」

と力み反つて大威張です

之を聞いた魔王は次郎さん中々強いねさあわたしと一つ取らふ  
と云て木の蔭からのそりくと出て來ました

蔭では威張ったものゝさで見ると一番大きいと思つたお父さんよ  
り大きくていかにも強さうなのひびっくりしました元々負けぎ  
らひの次郎の事ですから

「君が魔王かいえぢや取らふ」

と云つて一生懸命かゝて來ましたが何を云ふにも十許りの小供の  
事方々は獸を對手の魔王の事ですからかない様はありません二つ  
三つもみあふ中に次郎は見事投げられてしまひましたそれを見て  
居た弟は兄さんの負けたのがいかにも口惜しくどうかして敵をと  
つてやりたいと皆んなが一どきに魔王の手と云はず足と云はずと  
り組んで來ましたが次郎にさへかなはない弟たちのどうして魔王  
にかないませう見る／＼内に皆まかされてしまひました魔王はカ  
ラ／＼と笑つて

「どうだ次郎さんいくら威張ても此わたしにはとても叶ふまいさ  
ああんまり自慢した罰に之からあたしの家來になつて働くのだ」  
と云ふかと思ふと何も知らず草の上に遊んで居る六郎七郎ども迄

ひよつと手でつまんで又のそりく山奥さして入ってしまいました  
た

そんな事とは夢にも知らず八郎を連れて向ふのお池の方で遊んで  
居た太郎はもを夕方にもなつたからおうちへ歸りませうと思つて  
弟たちの居た處へ來て見ますとどうした事か影も形も見えません  
さあ大變どこへいつてしまったのかとまづ大聲で呼んで見ましたが  
返事もないのでどうしたらよいかとだんく奥へと呼びながらさ  
がして行きました  
すると向ふの岩に弟たちが見えますから大變に喜びかけて行つて  
見ますと皆んなしくく泣いて居ますのでふだんから優しい太郎  
はびっくり大急ぎで側へ行き

「あゝよかった皆んなどこへいったかと思つて心配したよさあ早くおうちへ行かうお母さんが待つていらっしやるから」と云て居ます處へ向ふから歸つて來た魔王

「お前はだれだいい一番の兄さんかいおとなしそうなよい子だね次郎がさっきあんまり威張つたからまかしてあたしの家來にしたのだ此處に居る弟たちが連れて歸りたければわしと相撲を取つて勝てたら返して上げやう」

と云ひましたが此太郎さんおすまふなど取つた事がありませんか  
らとともく勝つ處か自分迄又家來にされては其れこそ大變です  
からさすが惻好の太郎の事

「では魔王さん私はまだ弱くてとても貴所には勝てません之れか



ら歸かへって一生しやうけん懸命めいけいこして強つよくなつて來きますからそをしたら弟あとうたちを返かへして下ください」

と丁寧ていねいに頼たのみました魔王まおうはニコくしながら

「あゝよし／＼勝かてればいつでも返かへして上あげる」

と云いひますので太郎たろうはこんだ弟あとうたちに向むかひ

「次じ郎らうさんも三さんちゃんも皆みなんなおとなしくしておいで今いまに兄あにさん

がつれに來きてあげるからね」

と慰なぐさめて見み歸かへり／＼山やまを出でました

おうちへ歸かへりて此この事ことをお父ちちさんお母ははさんにお話はなしました處ところおふた

りは大層たいそうお慨なげききなさいますので太郎たろうは

「僕ぼくがきつと敵かたきをとつて皆みなんなを取返とりかへしますから。」

と申しますのでふだんおとなしい太郎の事どうかしらとは思ひな  
がらも少しは安心して居られました

それからと云ふ物は學校へ行つてはお友達を相手に相撲を取りう  
ちに歸てもひまさへあれば力のつくやうな遊び許りをして居り  
ました

さて其内に月日はどんくたつて美しい櫻も葉となり蟬もなき蜻  
蛉もそろく見え始めましたある日の事朝からカンくと照つて  
中々の暑さだものですから太郎は裏の川へ水遊びに参りました暫  
くポチャくと楽しく遊んで居りますと川上の方から太い長い材  
木がどろりく流れて來るのです太郎はびっくりもしあれにあ  
たれば大變と思つたものですから大急ぎで岸へ上らふとしますと

頭たまごの上うへで

「太郎たろうの弱虫よわむしくあほーく」

と云いふ聲こゑが聞きえます何なにかしらと上うへを見みましたが別べつに何なにも居ゐませんので岸きしへ手てを掛かけますと又またさっきより大おほ聲こゑで

「太郎たろうの弱虫よわむしくあほーく」

と云いひますそこで太郎たろうも少すこしくやしくなり笑わらはれてたまるものかと今こん度は自じ分ぶんから材木ざいもくの方ほうへ進すすんで行ゆき流ながれて來きたのを兩手りょうてでウンと押おへました處ところが不思議ふしぎにわけもなく其その大おほきな木きが持もち上ありましたので太郎たろうは自じ分ぶん乍ならびっくりし

「僕ぼくはいつの間まにこんな力ちからが出でたのだらふ之これながらも少すこしで弟あとうたちをつれに行ゆかれるな」

とうれしそうに獨り言して其材木を岸へあげ又余念なく泳いだり  
 何かしてやがて歸らふとして居ますと向ふの方から大きな水音を  
 ゴーく／＼させて見上るやうな石が流されて來ます太郎さん今度こ  
 そあれにぶつかつたら大變といそいて陸へ上らふとしましたが其  
 内に石はどん／＼流れて來ても今にも太郎を押つぶしそうにな  
 りましたのでこをなつては一生懸命力一ぱい大手を廣げて其岩を受  
 けて見ました處が又不思議わけもなく其岩が止つてしまいました  
 太郎は命が助かつたので大喜び早くうちへ行きませうとして着物  
 を着て居ますと後から

「おゝ太郎さんお前は此間から弟等を助けやうと思つて一生懸命  
 力を出したので大層強い子になつたもをそれなら魔王にも負け

やしない」

と云ふ聲がしますのでふりかへって見ますと眞っ白なひげのある立派なお爺さんが居たかと思ふと見えなくなつてしまいました太郎はびっくりしながらも今の云はれた事がうれしく飛ぶやうにしておうちに歸りけふの事をお父さんにもお母さんにもお話しますとおふたりとも大層なお喜び

「お前が一生懸命にけいこしたのでこんなに強い子になれたのですでは早く行ってみんなを連れていらっしやい」  
とおっしやいますので太郎も喜び勇んで其お山へと出掛ましたやがて此間の岩の處へ行きましたから大きな聲で

「魔王さんく太郎が参りました」

と二三度申しますと岩の中から魔王がのそりく出掛けて來ましたので早速二人は取組を始めました魔王の方ではわけもなく負して又家來にしようと思つて居りましたが中々強くてく容易に負けそうにもしません其内魔王もだんくくたひれて來ましたので「太郎さんお前は中々強くなつて來たでは七郎だけ返すからをやめやうぢないか」

と云ひましたが太郎今度は中々に承知しません

「僕まだ何ともありません皆を返して下さらない内はいやですさあもつとしませう」

と云つて掛つて來ますので又暫くハツケヨイくとやりましたが又魔王はつかれましたので

「では六郎も返すから今日は之でやめやうぢやないか」

と云ひましたが太郎は

「いやですく皆を連れなくてはおうちへ歸らないのですさあしませう」

と云ひながら又どんくと掛けて來ますので魔王も少し腹を立て一生懸命負かさうとしますがどうして中々です反って魔王の方<sup>ま</sup>が負<sup>ま</sup>けそうなので

「ぢや五郎も四郎も二人とも返すからやめにしよう」

と云ひ出しましたが太郎いつになくけふは承知<sup>し</sup>しませんそこで苦<sup>ま</sup>王<sup>わ</sup>もとうく仕方なく

「では皆を返してあげるからもをやめやう」

と云ひました太郎は始めてニコく

「それならもを止めませうさあ早く皆を返して下さい」

そこで魔王は六人の可愛い家來たちを太郎に取返されてしまいま  
した太郎の喜は一通りではありません久しぶりです皆と一所に手を  
引あっておうちへ歸りましたのでお父さんもお母さんも大層なお  
喜び又元の様に賑やかにたのしくお父さんの頸にかちりつく三郎  
おかあさんのお膝へ抱かれる六郎皆うれしさうに久しぶりでお母  
さんニコくお笑いになりました  
之も皆太郎が兄弟を思ふ心の深かったからで何でも一生懸命にな  
れば出来ない事はありません其からは次郎もあまり威張らなくな  
りましたときおしまい